りびんぐらいぶず　令和3（2021）年3月第1号

浄土真宗のこれから（歎異抄に聞く）

◆ご讃題

弥陀の本願まことにおはしまさば、釈尊の説教虚言なるべからず。仏説まことにおはしまさば、善導の御釈虚言したまふべからず。善導の御釈まことならば、法然の仰せそらごとならんや。法然の仰せまことならば、親鸞が申すむね、またもってむなしかるべからず候か。詮ずるところ、愚身の信心におきてはかくのごとし。このうへは、念仏をとりて信じたてまつらんとも、またすてんとも、面々の御はからいなりと云々。

(Ref『歎異抄』第二条、註釈版聖典 p833)

◆はじめに

令和二年の滋賀組親鸞聖人讃仰会の方針として『歎異抄』をひもとき、自身それぞれの人生を振り返って話し合ってみようではないかとの提案がなされ、当院仏教壮年会お聴聞の会では、組の要求に応えて、漫画歎異抄の読後感想文が三通提出され、令和三年度のお聴聞の会の目標展開にそのテーマを掲げて戴いた。そのご縁によって住職も歎異抄を改めて繙かせて戴いた。嘗て、瓜生津隆真先生のゼミのご縁を開いて下さったFさんから贈られた桜井　鎔俊著『歎異抄を読み解く』がそれである。

◆桜井　鎔俊著『歎異抄を読み解く』に聞く

宗門によって伝えられてきた教学に基づく親鸞聖人と、戦後世人の耳目を集めた歎異抄の親鸞聖人とはイメージが異なる。

宗門の場合、親鸞聖人が世人の前に姿を表すまでに二枚のレンズを通して写るといわれる。一枚は、第三代覚如上人、一枚は、第八代蓮如上人である。

親鸞聖人を語る場合、主著である『教行信証』をみのがすわけにはいかない。その中に説かれてある教、行、信、証という四つのカテゴリーの中で中心になるのが信であることは、「信巻」に別序が設けられていることからもそれと知られる。その信心が次の巻である証と直結するので、伝統的に「信証直接（じきしょう）の法門と云われる。

親鸞聖人には、もうひとつのカテゴリーがあって、それは、『教行信証』を簡潔にした『浄土文類聚鈔』と呼ばれるもので、前者はご本典、後者は、略典と呼ばれる。略典は、ご本典を簡略化しただけではなく、カテゴリーそのものの表現を変えている。

それは、ご本典であれほど明確に扱われていた信を行のカテゴリーの中に収めて、0教行証の三法門にしたことである。ここには重大な理由が潜んでいる。

その訳は、本典製作において信をあまりにも強調したがために、「信」とは、人間の頭脳で間違いの無いと云うことを確かめることのように誤解するものが大勢出てきたのである。これは、親鸞聖人の信ではなく、観念（哲学用語のイデア）である。親鸞聖人のおっしゃりたい信とは、念仏往生の願の謂われを信ずる以外のものではない筈。

そこで、親鸞聖人は、略典製作に当たって信を行の巻に収めて、教、行、証としてとり扱い、行と証とが直接に結びつく、「行証直接（じきしょう）」の法門を示し、これこそ法然聖人より伝えられたものと示した。

歎異抄の第一節では「弥陀の誓願不思議に助けられまいらせて」という信と「往生をばとぐるなり」という証とが直接結びついてここに四法門が示され、「信証直接」の法門が示されたのは、ご本典そのままの扱いであり、第二節に「ただ念仏して」という行が「弥陀にたすけられまゐらす」という証と結びついているのは、「行証直接」であり、三法門の略典の扱いである。この三法門こそ法然聖人によって伝えられたものであることが語られている。三法門は、伝承の法門であり、四法門は、親鸞聖人の追体験の表明と云われる。

親鸞聖人ご自身は宗派を浄土宗の他に別立する御意志をお持ちではなかったから、「法然聖人にだまされてもよい」の一辺倒でよかったが、彼の曾孫である覚如上人が本願寺を建て浄土一宗の中で浄土真宗という別の一派を名のる場合、法然の祖述者としての親鸞聖人では一派の独立を主張する意味がなくなるのである。

このため覚如は、三法門、行証直接、歎異抄第二節、法然の祖述者としての親鸞を地下に潜らせて、四法門、信証直接、歎異抄の第一節、唯信独達（信心のみの救い）の主張を前面に出し、法然を超えた親鸞を主張し宗祖としての地位を確立しようとしたのである。覚如の長氏存覚が「法然の伝承者としての親鸞」を強調するため、一宗を打ち立てることを生涯の大事業とした父の覚如から退けられ、義絶にまで追い込まれたのも、一宗建立の覚如の執念に反抗したからであったと思われる。

この覚如のレンズを通して見た親鸞像が歎異抄の著者唯円の語る親鸞のイメージと違うのは当然ではないであろうか。

◆真宗再興の蓮如のレンズがもう一枚加わると更に違ってくる。蓮如の時代は、日本の大衆の中心に座っていたのは農民で、禅が武士階級を中心に広まって行ったのに対し蓮如は農民を対象にして」教理が簡素で明解でなければならぬとして覚如教学をそのまま受けてより簡素化して、深遠な親鸞の教学を「ただ、たすけたまえと弥陀をたのんで、仏恩報謝の念仏を怠るな」と表現し、伝道して成功を収めたのである。

この蓮如教学が、江戸時代の宗学者達の手によってより綿密となり、現行の浄土真宗教学の中核と成ったのである。

明治維新を迎えて、東西本願寺は、共に新政府迎合の真俗二諦（しんぞくにたい）説を立てて、廃仏棄釈（はいぶつきしゃく）の嵐もどうにか切り抜け、江戸教学の惰性でここまで来たが、第二次世界大戦後の思想の変革にはどうしてもついて行けなく成ってしまった。農村の人口は減少し、資本主義の浸透で今や日本大衆の中心に座しているのは農民ではなくサラリーマンである。

◆大衆は何かはないかと歎異抄に目を向け始めた。歎異抄は蓮如のように念仏を報謝一辺倒には解釈しない。口に称えるものでありながら、心に拝むもの、心の中にありながら主体として崇め尊べるもの、複雑性がありながら「ただ念仏」の一語に集約される。そこに容易ならぬ魅力があって、心に悩む分別の思いをも根こそぎにしてくれそうにも見える。一朝一夕で何とかなるような安ものではない。生涯を掛けて求めて、これを楽しんで、悔いをのこさぬもの。大衆は薄々それを感じだしたのである。合掌。

◆三月二十日（土）春の彼岸会　十四時、十九時半
◆四月三日（日）二十時～仏壮お聴聞の会
◆四月十七日（土）十九時半～仏婦お聴聞の会

著作編集兼発行元（本願寺派　正覚寺内）〒520-0501 大津市北小松四五二番地
TEL077-596-0166、FAX077-596-0196 住職　堅田　玄宥